
みんなの学校2010 第3回



原水爆禁止運動と被爆者のたたかい



原水爆禁止2005年世界大会 (長崎)

2010年3月18日

岡山県労働者学習協会 長久啓太

本日のポイント

- ①「核兵器をなくす」運動の出発点
- ②反核運動のなかで、被爆者が果たした役割
- ③草の根の運動をどうつくっていくか



①核兵器をなくす運動の出発点

1945年

8月 6日 広島に原爆投下

8月 9日 長崎に原爆投下

8月15日 日本の敗戦



日本は連合国軍の占領下に

→実質は、アメリカの占領下に

(~1952年4月)

アメリカとソ連の冷たい戦争（東西冷戦体制）

アメリカは原爆の実相が広がること、ソ連に核兵器の情報が伝わることを恐れ、厳しく報道規制（プレスコード）をかけた。

被爆者の「空白の10年」のはじまり。

差別や偏見

被爆者の孤立

公的救済のなさ
（医療・生活）

生活苦

語れない

**組織的・恒常的な運動ではないが、
反核・平和を求める市民の運動は、占領下でも行われた。**



1946年8月5～7日 広島市主催の平和復興祭。7000人が参加。

1949年NATO（北大西洋条約機構）発足
冷戦の緊張が高まり、原爆使用の危険も増大。

1950年3月。スウェーデンのストックホルムで世界平和擁護大会常任委員会が開かれ、「ストックホルム・アピール」が発表される。

1. 原始兵器の絶対禁止
2. 禁止を保証する厳重な国際管理の確立の要求
3. 原子兵器を使用する政府は、戦争犯罪人として扱う
4. 全世界の人びとに、このアピールへの署名を訴える

ストックホルム・アピール署名

同じ年(1950年)の11月までに、世界で**5億人以上**が署名。

アメリカ	300万人
イギリス	120万人
フランス	1500万人
イタリア	1700万人
西ドイツ	200万人
東ドイツ	1704万人
ソ連	1億1551万人
中国	2億2375万人
日本	645万人

1950年6月に朝鮮戦争が勃発。

米国大統領トルーマンは、原爆使用を計画するが、世界世論の批判を受けて孤立することを恐れ、断念。

署名に示された国際世論が、原爆使用の手を押さえた。

人類史上、画期的な出来事。

1954年3月1日 太平洋ビキニ環礁で水爆実験
日本の漁船・第五福竜丸が被曝。



原水爆禁止の全国的署名運動

草の根で取り組まれた署名は、1年間で3200万人に（当時の人口9000万人）。

第1回原水爆禁止世界大会の開催へつながる。



婦団連、婦人民主クラブなどによる原水爆禁止署名運動＝東京・上野公園。1954.4.17 提供・連合通信
ビキニ水爆被災事件は、3月16日の新聞報道で日本国民に衝撃的に知らされた。三たび許すまじ原爆をの声とともに署名運動が全国に広がった。

1955年8月 広島で**第1回原水爆禁止世界大会**

14か国52人の海外代表と、2600人の日本各地の代表が参加。



原水爆禁止世界大会（第1回）開会総会=1955.8.6 提供・中国新聞
14か国3国際団体52人、日本全国から2575人の代表が参加した。



世界大会総会会場に
入りきれず、屋外から
参加する代表。

(1955.8.6 広島市公会堂)

世界大会総会会場に入りきれず屋外から参加する代表＝広島市公会堂 1955.8.6 日本原水協資料

1955年9月 **原水爆禁止日本協議会**（日本原水協）が**結成**

①核兵器廃絶、②核戦争阻止、③被爆者援護・連帯をかかげる。

反核運動の組織化・恒常化へ



世界大会への代表派遣、「3・1ビキニ・デー」、
平和行進、6・9行動、原爆写真展など

日本原水爆被害者団体協議会(日本被団協)の結成 (1956年8月)

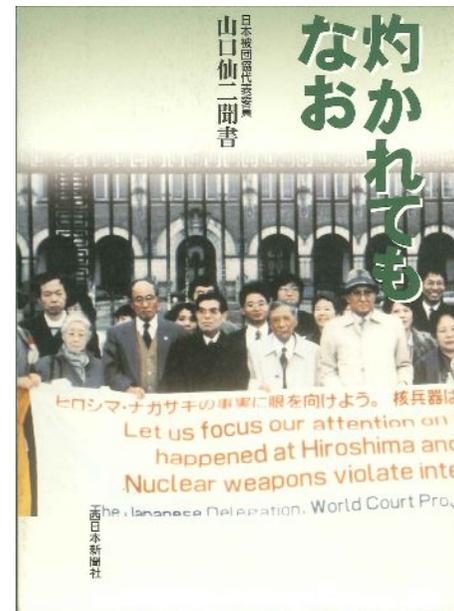


広島県原爆被害者団体協議会結成総会。1956.5.27 提供・中国新聞

被爆者の組織化

②反核運動のなかで、被爆者が果たした役割

～長崎の被爆者・山口仙二さんの歩みからみる～



『灼かれてもなお』西日本新聞社



② 上半身にひどいやけどを負った私
=長崎原爆資料館所蔵、塩月正雄氏撮影

14歳のとき、学徒動員で通っていた三菱の兵器工場裏で被爆。

顔と全身に大火傷をおう。

9月中旬まで約40日間、高熱等に苦しめられるが、奇跡的に回復する。

その後、顔から胸に残ったケロイド跡に悩まされる。

「何度、生きることを投げ出そうと思ったかわかりません」

1952年、ケロイド跡治療のための入院先で患者会を結成。(のちの「長崎原爆青年会」の基礎に)

1954年7月。長崎駅で単身、東京の国会議事堂へ陳情に行くことを思いつく。



無鉄砲な東京陳情をしたころの私。若さゆえの行動だった

「国会議員に直接、被爆者の治療費を国が負担してくれるように頼もうと思いついたのです」

しかし、完全な失敗に終わる。

「今、思うと本当に無鉄砲な行動です。しかし・・・命がけの陳情だった。同時に身に染みて分かりました『一人じゃ駄目だ、何もできない』と」

1955年の第1回原水爆禁止世界大会の直後。

長崎から被爆者代表で参加した山口美佐子さんと辻幸江さんが、仙二さんの自宅にたずねてくる。

長野県の参加者から、長野で開く原水爆反対集会に被爆者を送ってほしいと頼まれたが、美佐子さんは都合で行けない。代わりに仙二さんに長野に行ってほしいと要請。

8月、長野へ。



長野での集会に参加した私（前列左から2人目）

「集会は7、8カ所でありました。最初の長野図書館の講堂は会場からあふれんばかりの人。ラジオでも中継されていました。壇上に上がった私は被爆したときの様子、これまでの悲しみと苦しみを語りました。会場もシーンと静まり返っています。私の話に真剣に耳を傾けてくれ、ときにはすすり泣きも聞こえてきました。話す側と聞く側が一体となった感じです。私は積もり積もってきたものをようやく多くの人に聞いてもらったと感激し、泣きながら上着を脱いで上半身裸になってケロイドをさらけ出したのです。

それまで原水禁運動に無縁だった私が、初めて大衆の前で被爆の実相を訴えた。私の運動の出発点がそこにあります」

「仙二が長野に火をつけた。
長野が仙二を動かした」

「被爆者は、本当は人前ではしゃべりたくない。しかし、原爆のために今も苦しむ被爆者がいることを知ってほしい。その一心でみんな話をしたと思います。戦後十年たって、ようやく心の奥底に収めていた苦しみと悲しみを話せるようになったのです。そこまで来るのが、どんなに大変だったことか。

世界大会や長野集会に参加したほとんどの人は被爆者の話を聞くのは初めてで、衝撃を受けたといえます。原水爆禁止日本協議会(原水協)の代表理事を務めた吉田嘉清さんは『被爆者のつらい体験にも驚いたが、そんな被爆者が戦後十年も顧みられないでいたということがショックだった』と話すのです」

被爆者の証言と、それを受けとめ、反核運動に参加する人びと。「核兵器をなくす」ための運動の原点、本質が、ここにある。

1956年5月「長崎原爆青年乙女の会」が結成される。山口さんは初代会長に。

被爆者が支えあえる組織として。



長崎原爆青年乙女の会で行った海水浴。前列右が私

「思い出すのは、みんなで行った海水浴。長崎での第2回原水爆禁止世界大会の直前の7月です。たかが海水浴と思うかもしれませんが、傷あとが恥ずかしく銭湯にさえ行けない被爆者が、みんなの前で水着になることはとても勇気がいったのです。・・・被爆者にとって海水浴も特別なことだったので」

1956年8月 第2回原水爆禁止 世界大会が長崎で開催される。



第2回原水爆禁止世界大会の被爆者代表席に座る私（左から3人目）
= 1956年8月9日

「長崎の被爆者を代表して訴えたのは、渡辺千恵子さんです。母親に抱えられて登壇した渡辺さんは涙をこらえながら『原爆犠牲者はもう私たちだけでたくさんです。世界のみなさま、原水爆をどうかみんなの力でやめさせてください』と力の限り訴えます。会場からは大きな拍手がわき起こりました」



国連軍縮特別総会で自分の写真を手に演説する=1982年

『灼かれてもなお』の本
の最後で、山口さんは、
こう訴えています・・・

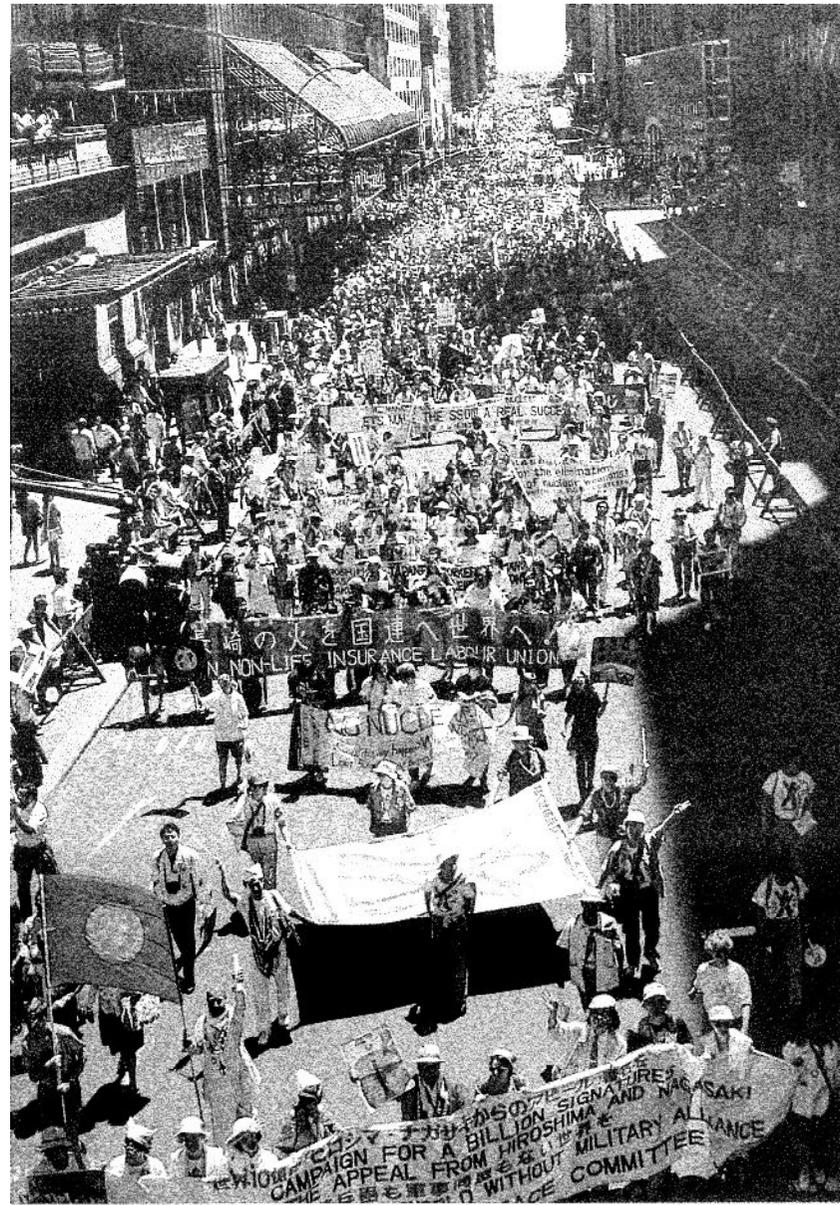


原水禁世界大会では何度も核兵器廃絶を訴えた



「ヒロンマ・ナガリキからのアピール」 震災直後の街頭署名＝見聞、アピール支持者は日本をふくめ、12カ国の平和団体代表によって発表され、各国の代表が署名を呼びかけた。1985.2.9 日本放送新聞社

草の根の運動は、日本、
そして世界に広がり…。



SSDⅡ（第3回国連事務局特別総会）要請で、マンハッタン五番街を行く「平和の波」大行進の参加者（1988.6.11、ニューヨーク）



海外代表が多数参加する、原水爆禁止世界大会。



世界大会で行われている「核兵器なくそう・世界青年のつどい」
ここから、また新しい「運動の継承者」が生まれていく。

③草の根の運動をどうつくっていくか

～原水禁運動の教訓をヒントに～

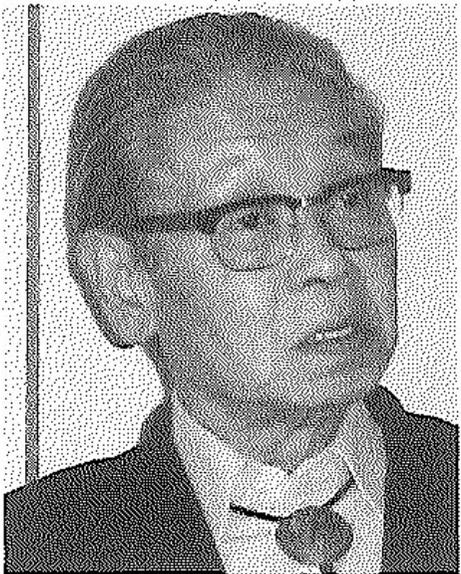
(1)「知らない」ことを克服する

☆被爆の実相の学び

☆被爆者の痛みや苦しみへの想像力

☆核使用を許さなかった、反核運動の歴史

私たちは、体験していない。
しかし、人間としての想像力がある。



「被爆者でなければ『被爆の実相と被爆者の実情』を伝えることができないのかといえば、そうではない。・・・『人間の心』をもって、『事実を正しくみつめる』人であれば、だれでも『証言』をすることができる」

(横川嘉範『原爆を子どもにどう語るか』高文研)

(2)組織的に、恒常的に、楽しく。

☆1人からはじまる。しかし、1人では続かない。

☆集団で活動することの大切さ。

☆本音の議論。つねに原点の問い直し。

長崎「高校生1万人署名活動」の経験から学ぶ(別紙資料)

最終回(4/8)テーマ



「核のない世界へ いま何が必要か」

- ☆NPT再検討会議の意義
- ☆日本の運動が果たしてきた役割
- ☆私たちに何ができるのか

おつかれさまでした。